

土瓶と湯飲み

江戸時代のやかんと胎衣埋納



いせき やかべまちやしき
出土遺跡 矢加部町屋敷遺跡

土瓶は陶器の瓶で、湯を沸かしたり、茶葉や薬草を煎じたりする容器です。江戸時代にはどこの家庭にもあった日本の伝統的な食器の一つで、明治時代に入ると小型のものは汽車土瓶として汽車の中でも使われました。金属製のやかんや鉄瓶が普及すると、大型の急須として使われるようになり、火にかけない磁器製のものが主流になりました。

本品の土瓶は江戸時代の幹線道路沿いの商店街から出土したもので、蓋とセットで出土したものは胎衣埋納に使用されていました。

現在煎茶を入れる時には急須を使うことが一般的ですが、急須が一般に使われるようになるのは土瓶よりも遅く、幕末に入ってからです。日本の急須は注ぎ口に対して直角に把手が付く横手急須ですが、中国でもヨーロッパでも後ろに把手が付く「後手」が主流なので、海外では「ジャパニーズ ティーポット」と呼ばれています。

お茶を飲む器には、抹茶を飲む「抹茶茶碗」、煎茶用の小型の茶碗、お寿司屋さんで使うような縦長の「湯飲み茶碗」がありますが、江戸時代でも日常的に使うものは現在と同じ煎茶用の小型茶碗と湯飲みです。来客用には揃いの蓋付茶碗を使いましたが、家庭で使うものは各人が決まったものを使うため、それぞれ気に入ったものを使ったり、見分けをつけるためいろいろな形や文様のものが使われるので、江戸時代の遺跡からはバラエティにあふれた茶碗が出土します。

下線の付く言葉の解説は裏面にあります



現代、煎茶といえば茶葉を入れた急須や瓶にお湯を注ぐ方法（淹茶法）^{えん}を思い浮かべますが、急須を使う方法は、江戸時代初期に中国から日本に伝わり、文化人の間で流行しました。庶民の間では、麦茶のように茶葉を土瓶に入れて火にかけたまま煮出す方法（烹茶法）^{ほう}が一般的で、急須が庶民にも使われ始めるのは幕末から明治初頭になってからです。

お茶碗はお茶の飲み方の変化に合わせて形が変化します。江戸時代はじめは抹茶茶碗を模倣した大型の陶器碗が多く、染付碗には中国の磁器を手本とした文様が描かれました。

江戸時代中期になると現代のように片手で持てる小型品が主流になり、現在多く見られる胴が丸い茶碗や筒形の湯飲みはこのころ生まれました。当時もてはやされた京焼のデザインを模倣した京焼風陶器が肥前で作られて流行し、染付碗では中国の手本から抜け出し日本独自の松竹梅や菊や唐草といったデザインが主流になりました。

江戸時代後期には文化人や富裕層の間で流行った「文人趣味」^{ぶんじん}が庶民にも広まりました。「文人趣味」は中国明朝の文化人が香り高い煎茶を楽しむ、漢詩に親しみ、美術工芸品などを愛でるという風雅を追及する生活スタイルで、「文人趣味」の影響で中国風の口が反る形の蓋付茶碗や山水画のデザインが流行しました。

胞衣埋納

胞衣とは赤ちゃんがお腹の中で包まれている膜のことで、赤ちゃんが生まれると一緒に排出されます。胞衣埋納は胞衣を容器に収めて土中に埋め、子供の健やかな成長や立身出世を祈る習俗で、中国の影響を受けたものと見られており、奈良時代の遺跡からも発見されています。産院での出産が日常化した現在では見られなくなりましたが、戦前から昭和30年代頃まで行われていました。

どこに埋めるかは地方によって異なり、家の玄関下や墓地に埋めることもあったようですし、その年の方位占いによることもありました。容器も土瓶に入れたり、「寿」と書かれた皿を重ね合わせたものに入れるなどさまざまでした。



京焼風のモチーフ



赤絵



文人趣味の山水文



福岡市西新町遺跡

出土胞衣埋納遺構

- 参考文献：福岡県教育委員会 2007『矢加部町屋敷遺跡Ⅰ』有明海沿岸道路関係埋蔵文化財調査報告第3集
福岡県教育委員会 2011『矢加部町屋敷遺跡Ⅲ』有明海沿岸道路関係埋蔵文化財調査報告第11集
福岡県教育委員会 2012『矢加部町屋敷遺跡Ⅳ 蒲船津西ノ内遺跡 蒲船津水町遺跡』有明海沿岸道路関係埋蔵文化財調査報告第12集
福岡県教育委員会 2009『西新町遺跡Ⅸ』福岡県文化財調査報告第221集

写真：当館撮影
(文化財調査室 秦)